

# 祐天上人のお名号

大正大学教授 玉山成元

お名号というのは、「南無阿弥陀仏」の六字を書いたもので、六字名号ともいわれる。絹または和紙、あるいは唐紙に書き、大きさにより大幅名号、中幅名号、小幅名号と分けられる。いずれも装幀されて大切に保存されている。

これらの名号は、念仏を勧め縁を結ぶために与えられるものであり、浄土宗では比較的早くから行われたが、室町時代ごろになると盛んになった。書体は謹厳な楷書で書かれたもの、あるいは行書、草書などいろいろであるが、画一的なものでなく、それぞれその人の風格がにじみ出て、信仰を深めるために役だった。

ふつう名号は大書し、下部あるいは左下部に小さく署名して花押を書くが、ときには名号の上部あるいは左右に、「令声不絶具足十念称」とか「天下和順 日月清明」など、経文を書いたものもあり、あるいは中央に六字の名号を大きく書き、左右に各四体、下部に一体の名号を小さく書き、一幅に十念の名号を表わしたのものもある。

祐天上人の名号は沢山残っているが、その形式もさまざまである。前に紹介した明信院の念持仏で、三尊仏の上に書かれた名号は、行書体で上段に五体、下段に五体のつごう十念が書かれているが、上段の最中は「仏」の字を使い、他の四つは「佛」の字を書き、下段の最中は「佛」の字、他の四つは「仏」の字を使っている。同じ十念を書くにしても、祐天上人は、仏の字を正字と略字に使い分けている。こうしたところに祐天上人の芸術性を認めることができるし、何事にも目立たないが、細心の注意をはらって行動された様子がしのばれる。

同念持仏の右側に装填されている小幅名号には、右側に「天下和順」、左側に「日月清明」と「無量寿経」の経文が入っており、さらに花押の右肩に「大仏」の丸い黒印をおしている。大仏復興をなしたとげた上人の記念の黒印であり、天下和順の言葉とともに極めて味わい深い。多くの庶民にこの名号を授けて縁を結び、勸進に役立てた名残といえよう。

それにしても祐天上人の場合、小幅名号はほとんどが行書で流れるような柔らかさがある。そして署名と花押は比較的大きめ、名号よりもやや小さ目に書かれている。

ところが大幅名号の場合は異なっている。大幅の用紙一杯に、太い筆で力強く書かれている。この名号は御家流をべー



# 祐天上人のお名号

大正大学教授 玉山成元

スにして、祐天上人が独特な形式を完成したものであり、後世に与えた影響も大きい。筆の力強さと、円味をおびた、いかにも円満な感じを与える書体は、上人の高徳を自然に表現したものと考えられる。そしてこの大幅名号に記された署名と花押はあまりにも小さい。「仏」という字の左肩に、あるいは「仏」という字の中に小さく記されている。おそらく大幅名号を授けられた人々は弟子か、あるいは篤信者の一部であったろう。そのため浄土宗の教義にもとづいた阿弥陀仏そのものを主張したものであろう。

法然上人は『選択集』の中で、「名号はこれ万徳の帰するところなり」といい、阿弥陀様のあらゆる功德が、この名号の中にあることを強調している。

祐天上人は、あらゆるところで念仏の功德を説き、多くの人々を感動させたことはいままでもない。その根底となる名号を力強く表現したのは、浄土宗の本質を明らかにしたもので、これが念仏の奥義であるといつて弟子らに与えたもので

あろう。だから署名も小さく、花押も小さく書き、阿弥陀仏に帰依する姿勢を示されたものであろう。

これに対して小幅名号は、本質的には同じであるが、有縁の信者がお守りとして大切にした場合が多い。

念仏の利益によって、死後極楽に往生することは浄土宗のたてまえであるが、だんだん現世利益を求める人々も多くなつていった。

とくに祐天上人の場合は、將軍や大奥の人々をはじめ、農民や職人や商人など、広い範囲の人々から生き仏とあがめられたため、長寿にあずかろうという人、あるいは病気を治したい人、また災害から身の安全を護りたいと望む人々など、いろいろな人が、それぞれの悩みを解消するために祐天上人の名号を希望した。だから上人も老体にむちうって、死の直前まで名号を書き続けていった。それを信者は肌身離さず持ち歩き、お守りにしていたものであろう。

だから小幅名号の場合は、名号もさる

ことながら、「祐天（花押）」とある、この署名に魅力があったといつてよい。

さらにまた、この名号を持っていたために交通事故をまぬがれたり、火災にまきこまれても助かったという証言が重なつていったため、一層神聖視されるようになっていった。